

要旨

本研究の目的はイレズミと彫り師を対象に、モノ研究を組み込んで、関係論的研究のアプローチからイレズミを身体的な概念に投影し、イレズミの制作過程で生み出される関係性とイレズミの意味の多層性の考察である。

序論では、イレズミに関する西洋と日本の研究を概観し、日本におけるイレズミの歴史をまとめた。また、本研究の目的を説明した。

第二章は物質文化研究の経緯を簡単に説明して、アルフレッド・ジェルの芸術論とティム・インゴールドの技術論を強調する。また、身体研究は常に物質研究と絡み合っているということと桑原牧子によるイレズミは身体の物質化という概念を指摘した。

第三章はイレズミの制作プロセスを詳細に記録し、制作過程で道具が彫り師に与える影響と道具は、どのような存在であるかを明らかにした。

第四章はイレズミの制作空間を「生産の場」を定義し、彫り師と被施術者の関係の再解釈し、彫り師と道具の関係を分析した。

第五章はイレズミを「関係性の美学」のアプローチから、一般社会に埋め込まれる可能性を分析する。

結論である第六章は本論を整理し、イレズミを彫るプロセスは道具と彫り師の互いに成長し、影響を与え合うことと指摘した。道具によって技術の感覚を刻み込み、彫り師の身体の記憶を生成、喚起して、技術に対する認識と定義を再構築する。一方、被施術者の身体は、個人的、社会的、文化的な対話の場として機能し、鑑賞者の感情やイメージを通してイレズミを補完する。見る者の無意識の知覚と情緒の中で、イレズミの社会的意味が更新されることを指摘した。

